# 第1分科会

## 第3分散会

**Ⅰ　はじめに**

報告・資料集 P.54の基調について確認した。

SDGsは本研究大会の地元テーマ「誰一人取り残さない社会の創造をめざして」とも重なり、さまざまな点で人権教育とつながる。全国各地で取り組まれている地道で確かな実践に学び合い、誰もが自分らしく生きがいをもって暮らすことができる人権文化あふれる学校・地域の創造をめざしていくための大きな学びにしていきたい。

討議の柱の確認後、報告・討論に入った。

**Ⅱ　報告及び質疑応答の概要**

**－報告1－⑩**

**今まで、僕、どうかしてたよね**
**～ポジティブ行動支援で子ども一人一人の思いを受け止める～（徳島県人教）**

**－主な質疑と意見－**

**徳島**　Aに対するポジティブ行動支援が、3年生になって効果が出始めた大きな理由は何だと考えているかお聞きしたい。

**報告者**　昨年は「Aをどうにかしないと周りの子どもがどうにかなってしまう。」と周りのことを中心に考えていた。本当にAのことを考えていたのかと反省をした。今年の担任は「Aをよくしたい」「Aのためにできることをしよう」とAに寄り添った。また、A自身が「私はこのままでいいのだろうか」と考え行動したこと。このあたりが2年生の頃と比べて大きく変わったと理解している。

**徳島**　「学校でやるべきこと」と「家庭で協力してもらうこと」を整理したとあるが、具体が知りたい。

**報告者**　学級の他の生徒と同じことはできていないが、Aなりに取り組んでいることを伝え、フォローをしてもらうようお願いした。また、作品の仕上げや課題の続き等を家庭にお願いした。

**大阪**　「今まで、僕、どうかしてたよね。」という一言は重い。このことばを保護者や担任はどのように受け止め、どのように返したのか。

**報告者**　保護者から「すごく嬉しい。担任のおかげだ。」という連絡があった。保護者にも担任にも具体的な聞き取りができていないが、「報われた」と思ったのではないか。

**神奈川**　「望ましい行動」とは？

**報告者**　教師はどうしても「100 点主義」になってしまい、できていないところに意識が向いてしまう。望ましい行動とは、「僕これでええねん」と自分自身を認める行動だと考えている。自分が成長するために少しずつ努力する姿を「望ましい行動」と捉えている。

**協力者**　子どもたちの実態をどのように把握し、教職員間で共有していたのか。

**報告者**　Q-U 等アンケートの実施と、日頃の見取りから手立てを考えていった。

**熊本**　Aが直面している差別にはどのような現状があり、どのように変化していったのか伺いたい。

**報告者**　2年生の頃は、Aが急変することから「関わらない方がいい」というような差別的な雰囲気があった。しかし、3年生になってからは友だちから関わることが多くなり、Aも受け入れるようになってきた。Aと一緒に生活をしていこうという雰囲気が学級にある。

**－報告2－⑪**

**ぼく、お風呂担当！（大阪府人連）**

**－主な質疑と意見－**

**福岡**　P.86 に「人との出会いを通して生き方を考える」学習を、全学年をとおして行っているとあるが、具体的な学習内容を教えてほしい。

**報告者**　総合的な学習の大枠を、1年生は「家族」、2・3・4年生は「地域」、5・6年生は「社会」と設定した。この年度は、1年生「家庭内の家事労働」、2年生「まちたんけんとお仕事」、3年生「まちづくり～『鳴滝の名物広め隊～』」、4年生「まちづくり・防災」、5年生「まちづくり SDG´s」、6年生「インクルーシブプロジェクト」と設定して取り組んでいる。

**福岡**　地域等との連携や交渉は、誰がどのように行っているのか。

**報告者**　管理職や担当者が窓口となって行っている。つながりができた後は、各学年で打ち合わせをしている。

**兵庫**　子どもたちと地域をつなげようとすると、教職員が地域を知り、つながっていなければならないと考えるが、どうか。

**報告者**　学校としての取り組みの歴史、先輩方の実践があったからこそできた取り組み。本当は「家の人に聞いておいで」とする取り組みを予定していたが、偶然、卒業生と出会い、つながれたことで今回報告した実践が実現した。子どもたちだけでなく、教職員にとっても、面白そうと感じられる学習をしていきたいと考えていたことが噛み合った結果が、この実践である。

**協力者**　報告のキーワードは「つながり」。地域とのつながりが、Aと子どもたちとのつながりにも役割を果たしている。この視点からのご意見・ご質問をフロアからいただきたい。

質問として、Aの母親やお兄さんの思いについて聞かせて欲しい。

**報告者**　仕事が忙しく、なかなか連絡が取れないという引継ぎがあった。家庭訪問の際にも、母親の思いや願いを聞くことはできなかった。トラブルがあり、母親に連絡をしたときの話しぶりから「Aには楽しく学校に行ってもらいたい」という思いや、AとAの友だちへの気遣いが汲み取れた。
**協力者**　お兄さんがゲストティーチャーを引き受けてくれた時の思いや、その時の母親の思いはどうであったか。
**報告者**　お兄さんは「命を大切にしている。」と語ってくれた。お兄さんは元自衛隊員であり、遺書も書く等、自分の命と向き合う経験があった。現在は介護職員として働くなかで、他者の命を預かる立場にあり、「命について、真剣に考えて欲しい。」と子どもたちに話してくれた。その様子を見ていたAは、改めて兄の存在を自慢に思っていた。
　母親はAから話を聞いたようで、大変喜んでいた。
**大阪**　報告から「その方が大切にしている生き方に触れる」ということをねらいにしていると受け取ったが、実際に地域の方と打ち合わせをするなかで、「子どもたちにこんな話をしてほしい」という具体的なものがあれば教えて欲しい。
　また、A以外の子どもたちの感想等も知りたい。
**報告者**　学習をとおして出会い直す場を設定している。出会いには、教師の願いもあるが、目の前の子どもたちに焦点を当てた取り組みにしたいと考えている。何度も打ち合わせをしているうちに、教職員のモチベーションにも変化があった。
　今回の出会いをとおして、周りの子どもたちのAに対する見方が変わったように思う。生き方に触れるというのは、キラッと光る生き方を伝えてもらうことだと考えている。
**福岡**　1990 年代、私たちの学校の子どもたちは荒れていたため、地域の力も借りた取り組みを始めた。しかし、今は形式だけになってしまっているところがある。報告を聞き、もう一度原点に戻って、子どもと地域をつなぐ取り組みをしっかりやっていきたいと考えた。
**報告者**　小学校が培ってきたつながりを認識したうえで取り組むことや、アンテナを高くすること、ねらいをしっかりともっておくことが大切だと考えている。
**福岡**　1年間をとおしてAがどのように変容したのか伺いたい。
**報告者**　遅刻が多かったが、朝、友だちが迎えに行くようになり、学校で過ごす時間が長くなった。担任以外の教職員から「遅刻が減ったね。」と声をかけられると、嬉しそうにしている姿が見られるようになった。宿題もやってきて、外で元気に遊んでいる姿を見ると、こちらも嬉しくなる。現状はまだしんどいことも多いが、NPO の放課後学習支援の場に行くと、落ち着いて学習に取り組んでいる。

**－報告3－⑬**
**「どうせお前らは俺のことなんかどうでもいいんやろ…」（滋賀県人教）**

**－主な質疑と意見－**
**三重**　報告の中に「思い」ということばがたくさんでてくる。報告者のAに対する思いや報告に出てこなかったAの思いを知りたい。また、報告者が、Aの思いをどのように学級の子どもたちに伝え、子どもたちはどう受け止めたのか知りたい。
**報告者**　Aの家庭背景として、一人親（父親）家庭であること、父親から暴力を受けていたり、ネグレクトの状態にあったりしていたこと、被差別部落にルーツがあること等の引継ぎがあった。
　A自身は、父親との関係に悩んでいた。また、父親も子育ての仕方がわからず悩んでいた。二人とも自分の思いをどう実現してよいかわからず、周囲をシャットアウトしていったように思う。
　Aとの関わりのなかで、「自分を守るために他者に攻撃的な態度をとっていた」ということが見えてきた。私は「もっと、人を信じていい。人のやさしさを素直に受け取っていい。」ということをAに伝えていた。
　Aは、学級の子どもたちから悪者扱いをされていた。その度「Aの心の中にモヤモヤしたものがあって、どうしても晴れない時には怒ることもあるようだよ。ダメなことはダメと言いながら、でも、Aの気持ちを分かってあげたい。あなたはどう思う？」と周囲の子に伝えていた。伝わった子や受け止めてくれた子もいたと感じている。
　最終的な学級の姿から、Aのよさが広がっていったのではないかと考えている。
**香川**　報告にあったケース会議も含めて、学校としてAのためにどのような連携、取り組みをしてきたのか。また、父親との連携を図ったのか。
**報告者**　Aと関わる中心人物を私とし、さまざまな情報が集まってくるような体制をつくった。特別支援学級在籍の子どもが学級で一緒に学習しており、担任も教室に入っていたことから、常に二人体制で学級をみることができた。Aに何かあったときにはどちらかが学級対応をすることができた。
　父親の生い立ちについても話をしてもらった。両親の関係、両親と父親との関係が悪く、父親自身も悩みをもっていた。Aに対してもどうすればよいかわからず困っていた。コミュニケーションを重ねるなかで、協力を依頼したり、Aに対する熱意を伝えたりした。
**大阪**　子どもたち同士をつなげることができた実践だと思う。後は父親とAをどうつなぐかが大事になってくるであろう。保護者と子どもをつなぐような学校の取り組み、計画等があれば教えて欲しい。
**報告者**　現在担任している5年生では、親子活動として一緒に遊んだり、保護者対象に SNS の取扱い方の学習会を開催したりして、保護者同士で話す場を設けた。学校の取り組みとしては把握できていない。
**大阪**　実践のなかで、Aの変容に気付き、周りの子

どもたちが変わるきっかけとなった具体的な姿が見られたのか知りたい。
**報告者**　ドッジボールをするときには、私が審判をした。反則について子どもたちから声が上がったときには「さっきのは、Aの言っていることが正しいよ。」というように返す場面もあった。そのうち、子ども同士で話し、Aの言い分も含めて結論を出すことができるようになった。学年当初は「Aは怖い」「関わったら自分が傷つく」とAをシャットアウトしていた子どもたちが、このような経験からAと関係をつくり、高まっていったと感じている。
　また、私がAに対して指導している場面で「先生、Aはケンカをしていたから、話をするなら落ち着いてからの方がいいよ。少し待ってあげて。」と子どもに諭されることもあった。子どもたちの方がAの気持ちをよくわかっているなと感じた。
**大阪**　そのような関係性ができるまでに、どのくらい時間がかかったか。
**報告者**　3学期までかかった。
**滋賀**　保護者との関わりについて質問があったので補足する。Aは父親を嫌っていたが、背景には、父親が暴力をふるうことや働いていないことがあった。そこで父親と福祉をつなげ、就労支援を行った。父親が働き始めると、Aは、父親が仕事に行き始めたこと、二人で出かけたり話をしたりしたこと等を話すようになった。Aに「お父さんを大事にしてあげてね。」と言うと同時に、父親にもAに対する関わり方について提案した。時間はかかったが、少しずつよい方向に動きつつある。今年度、Aはあたたかい学級のなかで過ごしている。
**大阪**　存在を認めることが大切であり、その姿を他の子どもたちが真似していく。担任が冷たい態度で接していれば冷たい学級ができる。学級経営において、とても大切なことだと感じた。
　父親の育ちを知ることは本当に大切だ。また、学校生活をとおして、A自身の生活力を高めていくことは、父親から自立につながり、自信をもって人生を歩んでいけるのではないかと思った。
**福岡**　教室で落ち着いて過ごすことが難しい子どもに対応する立場にあったとき、SSW から「先生は人類を代表してこの子に関わるんですよ。」とアドバイスをいただいた。大げさかもしれないが、きっとそうだろうと思う。報告を聞いて、Aの大人に対する不信感を、報告者が払拭したのだろうと感じた。
　自分自身の実践を振り返ったとき「まずは落ち着いて学習できる環境をつくらなければ」と考え、しんどい子どもたちの気持ちを押さえつけてしまっていたなと思った。明日からは「なぜそのような行動をしているのか」ということを理解するところから、もう一度頑張っていきたい。
**協力者**　報告から、褒めるだけではなく、子どもの本当の思いや暮らしの背景をつかまなくてはいけないということが確認された。そしてその思いを周りの子どもたちに伝え、つないでいく取り組み、つなぎ直していく取り組みが大切だということが確認された。

**－ 一日目の総括討論 －**
**福岡**　3本目の報告（滋賀）について伺いたい。Aとの信頼関係をつくっていくなかで、「ここが肝だったな」と思う部分があったら教えて欲しい。また、報告者自身の子どもの頃の経験や思いがあったうえで、学校現場を選ばれた一番大きな理由が知りたい。
**報告者（滋賀）**「行動については、指導することもあるけれど、気持ちは全部丸ごと受け止める」ということを大事にしてAと関わってきた。「イライラしたり怒ったりしてはいけない」という風に伝わると、気持ちを我慢させたり、抑圧したりすることになる。
　私は子どもの頃、学校が嫌いだった。苦しみしかなかった。その分、誰よりも学校と向き合い、考えてきたと思っている。学校に行けなかった自分を受け入れ、弱さを認めることができたのも学校のおかげだと思うようになった。今の私の強みも学校にあると考えている。
**協力者**　子どもと教師、子ども同士が信頼関係を結んでいく、保護者と子どもの信頼関係を修復する。私たちの役割は、子どもたちの人生をつくっていくことにつながっている。みなさんの実践と報告とを重ねてご意見をいただき、共有をしたい。
**滋賀**　愛着に課題の見られたAにとって、信頼できる大人の存在が大切だと考え、学校として、担任である報告者とAが強くつながることができるような体制づくりを行った。楽しいことを一緒にやりながら対話していくなかでAの心がほぐれていった。担任との関係ができたことで安心し、他の子どもたちとの関わりが生まれるようになったと思われる。愛着に課題がある子どもたちに対して、この実践が参考になるのではないか。
**福岡**　2本目の報告（大阪府）について。卒業生にとって、後輩たちに話をしたことは自信になったと考えられる。また、教職員にとっても、卒業生たちのその後を知るきっかけになったのではないか。私の所属校の卒業生についても、その後を知りたいと考えた。
　また、フロアから出た「今、あなたが、人類を代表して子どもたちに関わっている」ということばが胸に刺さった。
**愛媛**　学校のなかでしんどさを感じている子どもは増えてきている。子どもたちのために何ができるのか考えていくことの大切さを、3本の報告から学び、勇気をもらった。
　「褒める」ことは大切だが「認める」ことも大事にしていきたい。認めるというのは相手の価値基準に立って行う行為である。一人ひとりの成長過程をしっかりと見ていくようにしていきたい。
**愛媛**　1本目の報告（徳島）からは「自分自身の見方を変えると、子どもたちの見え方が変わる」ということ、2本目の報告（大阪府）からは「友だちや地域

とのつながりの大切さ」、3本目の報告（滋賀）からは「しんどさに最後まで向き合うこと、関わりきること」をそれぞれ学ぶことができた。

**三重**　「指導しなくては」という思いが先立ち、子どもの思いを受け止めて褒めることができていたかと振り返った。また、子どもと教師、子どもと子ども、学校と地域、保護者とのつながりの大切さについて学ぶことができた。実践に活かしていきたい。

**奈良**　かつて、補充学級（解放子ども会）では、「自分の地域を誇れる子どもに育って欲しい」という願いから、地域とつながることを大切にしてきた。たくさんの人とつながるための人材バンクの作成も行ったことがある。現在校では総合学習のなかで地域を教材として学習をしているが、「人」に焦点が当たっていない。「人とのつながりをつくり、自分の地域が好きな子どもたちを育てていく必要があると改めて感じた。

3本目の報告（滋賀）にあった父親の育ちが気になった。今、部落差別が見えにくくなっている。父親や、その母親（Aの祖母）が差別のなかでしんどい生活をしていたために、子どもと向き合うことができなかったのではないかと想像している。報告者（滋賀）と父親とのやりとりのなかで、差別のつながりを感じたことがあったか知りたい。

**報告者（滋賀）**　父親に「ムラは危ないから来ない方がいいよ。」と悲しげな声で言われたことが印象に残っている。被差別部落については、勉強したことしか知らなかったため、現状がわからなかった。父親の話を聞いていると、そこには、きっと当事者にしかわからない何かがあるのだろうと感じた。

**福岡**　「来年は〇〇と同じクラスにしてほしくない。」等、保護者の間で凝り固まった差別がある。それが子どもや保護者を傷つけている。子どもたちが互いのよさを家庭で広げていってほしい。

**福岡**　先程の「ムラは危ないから来ない方がいい。」という話で誤解があってはいけないので一言。実際は自虐的にそのような表現をする場合がある。

**報告者（滋賀）**　「うちの近くの駐車場に車を停めたら、傷をつけられるよ。ハハハ。」と父親が言っていたことがあるが、それが自虐的な表現に当てはまるのかと思う。それに対してどのように反応してよいかわからなかった。

**奈良**　あるは母親の話。ムラで生まれ育ったその方は、地区外の方と結婚をした。結婚相手が職場の人と近所を通ったとき、「この辺りは気を付けた方がいいよ。」と言われた。「俺は『そういうのは、おかしいですよ』ときちんと伝えた。」と、帰ってきて報告してくれたという話をしてくれた。しかし、続けて「それって地区外の人だから言えるんですよね。」と私に話してくれた。その方は「ムラで生まれた自分たちには、そんなに簡単に言えない」ということを言いたかったのだと思う。差別に出会ったとき、こう答えればよいという正解はないが、自分の思いや考えを伝え合える関係をつくることは大事である。

**山口**　全国の部落のなかには、厳しい生活実態の地域もある。「自分たちのまちはガラ悪いよ。でも、あたたかいところだよ。」というように、Aの父親の部落観をひっくり返すことができるのは同和教育である。Aも今後さまざまな壁に当たることがあるだろう。その時に部落問題学習が大切になってくる。これは父親からのサイン。学ぶチャンスだと思ってAの父親とも話をしてみてはどうか。

**大阪**　自分自身のルーツが被差別部落にあるかもしれないと思うようになってから、「この人には言える」「この人には言えない」というようなフィルターが、他者との間にできたように感じた。

Aの父親の話を受けて考えたことや学んだことを、担任を通じて父親に伝えると、喜んでくれると思う。部落問題に出会ったとき、どう関わるかによって信頼を得ることもできる。

**大阪**　Aの父親に「うちに来ない方がいいよ。」と言わせたのが、差別の現実なのだろう。そのような状況に立ち向かっていける子どもたちをどのように育てていくかということが、学校が取り組まなければならない課題だと思う。

**－　一日目のふりかえり　－**

**協力者**　一本目の報告（徳島）では、できていることを褒めることで、望ましい行動を増やしていくポジティブ行動支援について報告がなされた。教職員が子どもの見方を変えていくことで、子どもたちが変容し、課題のある子どもが安心して教室で過ごすことができるようになった。

質疑をとおして、望ましい行動とは「ぼくはこれでいいんだ」と自分自身を認められる姿であること、子どもたちの「みんなに認められたい」「つながりたい」という思いに気付き、頑張りを見ていけば、子どもたちは安心し、自信をもったり互いを大切にし合ったりできるということが確認された。

二本目の報告（大阪府）では暮らしの厳しいAに、さまざまな人と出会い、自分にできることを考えて欲しいという願いのもと取り組んだ報告がなされた。その結果、Aは自分が大切に育てられていることに気付き「優しい人になりたい」と将来の姿を思い描くようになった。

質疑をとおして、子どものしんどさの背景に、その子の思いや家族・地域の願いがあることに気付かなければならないこと、保護者や地域の人と話すなかで受け止めた思いを子どもに返していくことが、子どもたちに展望をもたせ、顔をあげ、胸を張って生き方を問い続けさせるのだということが確認された。

三本目の報告（滋賀）では、Aと報告者の子どもの頃の姿を重ねながら関わり方を問い続け、Aの本当のしんどさは何か、どのように寄り添えばよいのかを探っていく営みが報告された。弱さを見せられず苦しんでいたAと報告者がつながることで他の子どもたちのAに対する見方を変え、つないでいく取り組みを根気強く丁寧に積み重ねていった

結果、Aが苦しみから解放され、なかまとつながっていく姿が見られるようになった。
質疑では、Aと父親をつなぎ直していく取り組みが課題として挙げられた。父親が育ちのなかで見てきた部落についても、報告者が受け止め、向き合い続けて欲しいという声があった。

**－報告4－⑭**
**「Aが優しいから、お母さんは心強いんだね」**
**（三重県人教）**

**－主な質疑と意見－**

**大阪**　質問は2点。1点目は、子どもたちのなかに「ルッキズム」のようなものは見られたか。2 点目は、母親の手紙の内容を詳しく教えて欲しい。
**報告者**　「Aに近寄りたくない」と思わせたのは、私のAに対する見方が子どもたちに伝わったからではないかと思う。先輩から「それがあなたのなかにある差別心だよ」と指摘され、ハッとした。また、先輩教員がAと自然に関わっている姿を見て、関わり方を学ばせてもらった。
母親からの手紙には「Aへ。これからも頑張ってください。いつも幸せでありますように。ありがとう。いつも私の話を聞いてくれたり、忙しいときはいつもすぐに助けてくれてありがとう。いつも勇敢な少年でいて欲しい。ママの願いはずっと健康でいてくれることと、アレルギーが治ることです。ママがあなたのことをとても愛しているといつも思ってくれることを願っています。大好きよ。私のA。」と書かれてあった。
**三重**　A以外にも一人でいる子どもがいたが、周りの子どもたちがA以外の子も気にかけるようになったのは何故か。どのようなアプローチをしたのか知りたい。
**報告者**　周りの子どもたちがAとつながれたのは、Aのアレルギーのことを知ったからだと思う。教室で飼育していた生き物の世話をするなかで、子どもたちが協力し始め、今まで関わりがなかった子どもたちが少しずつつながっていった。
**三重**　報告から、Aに対する周りの子どもたちの関わりの変容はわかったが、Aから関わっていく姿は見られたか。
**報告者**　遊んでいる子どもたちに「入れて」と言い、輪に入っていく姿や、絵を描いている子どもに「これ〇〇の絵だね」と声をかけ、一緒に絵を描いて遊ぶ姿が見られた。
**大阪**　母親をゲストティーチャーとして学校に迎えるまでのプロセスや、その際の苦労等について聞きたい。
**報告者**　Aは母親の母国に憧れをもっている。Aは「甘いご飯」が好きと話していた。これは、フィリピンの貧しい家庭の料理で、子どもが好きな料理だと母親が教えてくれた。また、Aは、フィリピンにいる母親の家族に会うことや現地のおじさんとバイクに乗って買い物に行くことが夢だと教えてくれた。本校では、昨年度、人権学習において多文化共生をテーマに取り組むことになっていたこともあり、Aが憧れをもつフィリピンについて学習しようと考えた。
家庭訪問をする度に、母親が嬉しそうにフィリピンの話をしてくれたことがきっかけである。しかし、最初はうまくコミュニケーションを取ることができなかった。英語で話したり手紙を書いたりしても通じず、通訳と一緒に話をするようにした。言葉は通じたが、気持ちまでは通じず、苦労した。父親が間に入ってくれて、やっと、じっくりと話ができた。母親も私も、互いに「仲よくなりたかった。話がしたかった。」という思いであったことが分かった。
**三重**　Aと家族の関わりや、Aの家族や自分自身への深まりについて教えて欲しい。一人の子どもとの関わりをとおして、その子ども自身の深まりを周りの子どもたちに広げ、それぞれが深めていくような実践をしたいと考えて取り組んでいるが、簡単にはいかない。Aの周りの子どもたちが、自分自身や家族に対する深まりの具体が知りたい。
**報告者**　Aだけでなく、困っている子どもに対してその課題に応じて取り組んできた。しかし、自分自身や家族の深まりまではわからない。二分の一成人式の取り組みのなかで、二十歳の自分に手紙を書いた。多くの子どもが「クラスのみんなが優しくて幸せだ」と書いていた。
**愛媛**　報告者とAの保護者とのつながりについては報告にあったが、その後、保護者同士のつながりや、Aの家に友だちが遊びに行くようなつながりがあったのか教えて欲しい。
**報告者**　Aの母親と他の保護者同士は、まだつながっていない状況にある。Aには双子の妹がいる。母親に「双子サロン」に参加してはどうかと声をかけ、地域の方と交流することを提案した。
Aは放課後、家の近所で自転車に乗ったり、公園に行ったりして友だちと遊んでいる。
**山口**　当初、父親は強い口調で要望することがあったようだが、3年生の頃の様子や学校としての対応について知りたい。また、フィリピンの学習をとおして子どもたちが変容し始めたのは、きっかけに過ぎないと考えている。Aをなかまとして受け入れられるようになったのは、その後、何らか学級としての取り組みがあったからではないか。
**報告者**　3年生の時は、アレルギーの症状がそこまでひどくなかった。3年生の頃、母親が妹たちを妊娠し、入院した。父親は仕事があるため「仕事が終わるまで学校でAを待たせてほしい」という要望をしていた。Aと姉の二人の担任が対応し、二人は宿題をする等して放課後も学校で過ごした。学級の取り組みとしては、Aがなぜ休んでいるのか、周りの子どもたちは知らなかったことから、「Aはアレルギーの症状が出て、夜も眠れなかった。だから今日は学校に来ることができない。」「今日もお休みだね。Aは大丈夫かな。アレルギーの症状が出ているのかな。」と日々子どもたちに話をしていた。Aが早退をして通院する際も「A、行ってらっしゃい。」

と声をかけていた。
**大阪**　Aの母親に学校で話をしてもらったときのAの思いやその後の様子について教えて欲しい。
**報告者**　母親に学校で話をしてくれることを、Aはとても楽しみにし、喜んでいた。授業後に書いた手紙には、「お母さんが来てくれて、とてもうれしかった。ありがとう。でも、もう来てくれることはないのかなぁ。」と書かれていた。また来て欲しいのだろうと感じた。

**－報告5－⑫**
**むすぶ・くねんかんで**
**～小中一貫校での成長と、渡日生との出会い～**
**（大阪市人教）**

**－主な質疑と意見－**
**三重**　報告にあった二人の子ども以外にも、地域には外国につながる子どもがたくさんいるように思われるが、子どもや保護者、地域の人たちの外国人に対する見方や課題、差別の実態について教えて欲しい。また、「志学式」において、地域の実態を踏まえた人権学習の実践をされているのであれば知りたい。
**報告者**　報告に出てくる学年の子どもたちは、比較的、なかま意識をもって関わっている。そのため、多文化や外国籍に対する差別はなかったように思う。小学校時代には差別事象があったと聞いている。しかし、その都度、話を聞き取り、丁寧に指導をしてきている。「志学式」については、異動して間もないため、取り組みについて十分把握ができていない。本年度は人権教育主担当であるため、講師と打ち合わせをしたり、事後の子どもの感想を読んだりしている。そのなかで印象に残っているのは「国がちがっていたとしても、それを理由に自分の夢をあきらめるような世界はつくりたくない。」というものである。地域の方には、地域の歴史や産業、思いを子どもたちに伝えてもらっているが、そのように当事者とたくさん話をすることで子どもたちは学びを深めているのではないかと思う。
**三重**　5年生の時には荒れが見られた学年が、ここまでまとまりを見せるようになるまでには、何があったのか。また、外国につながる子どもたちがたくさんいるとアイデンティティが問題になってくる。自分の国を誇れる、また、まわりの子どもたちが「素敵だな」と思える教育が大事であると考えるが、どのように取り組まれたのか教えて欲しい。もう1点。渡日生の「周りの子どもや自分は苦労をした。同じ経験をさせたくないから親切にするのだ」という声が報告された。このような思いが、学校文化として息づいているとすれば、どのように育ててきたのか。この3点について教えて欲しい。
**報告者**　子どもたちが落ち着いていたかと言うと、そうでもない部分もあった。中学生になってもトラブルはあった。小学校の先生方も私自身も関わり続けるということを丁寧に積み重ねていった。アイデンティティの質問については、私自身の反省点である。目の前の進路等にむけた取り組みを優先していたため、それぞれのアイデンティティについて深める取り組みが十分できていなかった。他の報告を聞きながら、自分自身を省みたところである。3点目について、コミュニケーションをとることが難しいということが不安だったようだ。正義感が強く、真面目な子どもだったことから、どうしても助けてあげたいという思いになったようだ。学校全体としては、志学式以外にも、多文化共生、部落問題、障がい者の人権問題、在日韓国・朝鮮人の人権問題について学ぶ活動を小・中で行い、学びを深めている。その学びを文化祭で発表して小中で交流している。
**三重**　アイデンティティについては、本当に難しいことだと考えている。これだけ多くの外国につながる子どもたちがいるということは、宝だと思う。小中9年間で、自分の国を誇れるようになること、周りの子どもが知る学習をすすめていくことが、「ちがいがわかる」「認め合える」という子どもたちの宝になるチャンスだと思う。ぜひ、今後も取り組みを進めて欲しい。
**報告者**　ありがとうございます。
**大阪**　課外活動としての多文化共生の取り組みがあるとの話があった。私の所属する学校にも、外国につながる子どもたちが多数通っており、月1回「地球村」という取り組みを行っている。報告者の学校で取り組んでいる多文化共生の取り組みについて、もう少し詳しく教えて欲しい。
**報告者**　小中学校において、自分が興味ある国について挨拶や国旗、文化等について調べる学習を行っている。文化祭では、多文化共生のグループでは、去年はバンブーダンス、今年はマイムマイムを踊る等の発表もしている。それぞれの国について学んだり、遊んだりする活動を行っている。小・中それぞれに学習計画を立てて取り組んでいるが、文化祭については特別な時間割を組んで実践している。
**大阪**　小学校では、興味のある国についてグループで調べ、歴史や食べ物、遊び等について発表をしている。
**大阪**　学級通信に対する保護者や子どもの反応はどうであったか。
**報告者**　信頼関係をつくるため、まずは自己紹介をし、自分自身や学級への思いを知ってもらいたいと考えた。また、「最近の学級の様子」等についても子どもたちに率直に投げかける内容を書いた。子どもたちをつなげるために取り組んだ班の交換ノートの内容も掲載した。学級通信を楽しみにしてくれる保護者もいた。
**三重**　学級の子どもたちが、JSL のために授業を抜けてしまう二人に対して思いを巡らせる姿が報告されたが、報告者はどのような働きかけや声がけをしていたのか。登校することが難しかったクラスメイトに対しても同じように思いを巡らせている子どもはいたのか。

**報告者**　JSL だけでなく日本語教室にも通っていた。「二人は日本語がまだ不自由だから困っていることがたくさんある。困っていることを言葉の力で乗り越えるために、まずは勉強しているよ。二人も頑張っているんだ。」と話をしていた。不登校傾向にあった子どもに対しては家庭訪問でつながろうとした。仲のよい子どももいたため「SNS でこんなことを伝えて」と子どもを介してつながりをつくった。班長会議においても、サポートが必要な友だちへの対応等について話し合い、支援を続けている。

## Ⅲ　総括討論

**協力者**　まず、5本の報告に対する質問を受けたい。その後、5本の報告に共通する「子どもの思いと背景に気付き、つながりをつくる、深める、広げる関係づくりのために何をしていけばよいか」について、実践や意見を出し合いたいと考えている。

**滋賀**　今日の1本目の報告（三重）で、家庭訪問の際、Aの保護者はどのように考えていたのか、またつながりができてきたと思われるまで苦しかったと思うが、そのあたりを聞きたい。

**報告者（三重）**　母親は「大きな声で騒いでいる外国人に日本人が冷たい眼差し送っていたことがあり、とても気になった。」と話をしてくれた。その話から、自分たちがうるさいから、おとなしい日本人が嫌がると思い込み、日本人との関わりを控えているのだということがわかった。家庭訪問をした時も「話したいことはあるけれど、どのように気持ちを伝えればよいかわからなかった。」と話してくれた。父親は強い口調で学校に要望をしていたが、家庭訪問では優しい表情で私の話を受け止めてくれた。電話での態度だけで判断してしまい、父親の思いに気付くことができていなかったことを申し訳なく思った。そのことを伝えると「こちらも無理と分かったうえで頼ませてもらっていた」と話してくれた。少し分かり合えたのではないかと考えている。父親自身、いじめに遭った厳しい経験があり、Aに「友だちをいじめてはいけないと話している。」「Aが本当の自分の子どもではないからこそ、厳しく育てたい。妹と比べられたり、本当の父親ではないからきちんと育てられなかったと言われたりしたくない。」という思いをもっていた。Aを思うが故、関係がうまくいかない等、悩みも多いが「Aとしっかり話をしてわかり合いたい」と願っていることが分かった。

　母親とつながりができたと感じたのは、母親の気持ちを聞くことができたときだった。タガログ語の通訳を交えて話をしたが、はじめは母親の気持ちを聞くことができなかった。母親は、ビサヤ語の方が気持ちを伝えやすいということがわかり、話ができるようになった。

**福岡**　通訳の方は市の職員なのか、独自に依頼したのか。

**報告者（三重）**　通訳の確保をしてくれた先生が会場にいるので、代わります。

**三重**　学校にいる通訳は教育委員会から来てもらっているが、家庭に入ってもらうことが難しかった。市役所にいたタガログ語を話せる方にお願いをして家庭訪問に同行してもらったが、母親と話をするにはビサヤ語の方がよいと気付いた。学校に来てくれている通訳の方はビサヤ語がわかるので、二人の役割を代えてもらい、家庭訪問に同行してもらった。この経験をとおして、通訳を介して保護者と話をする際、事前の打ち合わせで担任の思いや伝えたいことをしっかりと確認しておくことが大切だと学んだ。

**協力者**　むくのき学園（大阪）では、通訳を活用した事例はあるか。

**大阪**　本校でも通訳に来てもらっている。懇談等、通訳が必要な方が学校に来られるときに一緒に話をしてもらうことが多いが、家庭訪問に同行したことはない。日常の様子等について話を聞くときや家庭訪問に通訳がいればよいと思うが、通訳の数が少ない。懇談の日程を合わせるだけでも非常に苦労をした。「やりたいけれどやれない」という、もどかしい思いをしているのが現状である。

**三重**　私の勤務校には、外国につながりのある子どもが 30 数名在籍している。通訳も常駐しており、学年通信を出す際は、配付する前に通訳さんに渡して、複数の言語に翻訳してもらっている。日本の言葉も文化もわからない母親から、給食指導について苦情があったが、その際には通訳できる教員の力を借りて誤解を解いたり、日本の学校行事について、1カ月前に電話で説明したりしている。家庭訪問にも同行してもらっており、助かっている。外国籍の母親たちは、地域とのつながりもないことが多く、道に迷った場合には警察に行くこともあるようだ。外国籍の方が地域とつながることが大事であり、そのために学校ができることはないかと考えている。

**福岡**　子どもたちのための教育条件整備として通訳の方を配置するよう行政に働きかけることが大切だと感じた。

**福岡**　私の勤務する高校にも、外国にルーツのある子どもが多数在籍している。その子どもたちの保護者は、どちらかが外国籍の方である。子どもたちは小さい頃から日本で過ごしているため日本語を話すことができるが、その一方で、外国籍の保護者の母語は話すことができない場合がある。その子どもたちが高校生になると、外国籍の保護者に対して、諦めに似た思いをもっていることがある。周囲の人たちの外国籍の方に対する意識のようなものを内在化してしまっている。また、難しい話が通じないため相談ができなかったり、わかってもらえないと感じたりすることが多い。精神的にしんどくなり医療機関にかかることもある。報告にあったように、小さい頃から外国籍の保護者に対する肯定的な見方やつながりを育てる実践を積み重ねることが大事だと学んだ。

**大阪**　子どもとつながるためには、保護者とつなが

ることが大前提である。ある子どもの祖母とつながりができ、「やんちゃな子どもたちを母親が毎日叱っている。怒りすぎではないかとも思ったが、母親が頑張っているから止めることができない。」と話してくれた。その話を聞き、これまでトラブルがある度に「家庭でもしっかり指導してもらいたい。」という思いが自分自身のなかにあったのではないかと振り返り、保護者との関係づくりに対する考えを改めることができた。

滋賀の報告を受けて、部落問題について会場からたくさんの意見があった。地域の方から「何か苦しいことがあったら、いつでも戻ってきていいんだよ」と子どもたちに伝えてほしいと言われたことがある。それは社会にまだ差別が現存しており、安心して生活ができないことの表れだと捉えた。「全人類を代表して子どもと向き合う」という昨日の意見が心に残っている。明日からの人権学習、部落問題学習に取り組んでいきたい。

**報告者（滋賀）** 報告に対して多くのご意見をいただいた。報告してとてもよかったと感じている。何故、わたしはこれほど人権について真剣に取り組もうとしているのかと考えた。不登校であった当時、私は死にたかった。死にたい自分のなかに、「生きてはいけない自分」がいる気がしていた。けれども死ぬことができず、ずっと葛藤していた。眠ると明日がやってくるので、眠るのが怖かった。しかし、今、世界中に「明日が怖い人、怖くない人」がどのくらいいるのかと考えている。さまざまな差別や価値観のなかで「生きてはいけない」と感じている人がいるのであれば、それは間違っていると思う。これからも学び続け、考えを深めていきたい。

**神奈川** クラスに溶け込めず、学校に来たくないという子どもがいた。「学校に来てほしい」という思いから、積極的に声をかけたり、クラスの子どもに「あの子に声をかけてあげて」と話をしたりした。自分では努力をしたつもりだった。しかし、ある日、クラスの子どもに「来年は先生のクラスになりたくない。先生のことは好きだけど、先生のクラスになると、きっと、あの子と同じクラスになるでしょ。」と言われた。自分自身が悲しくなった。自分としんどい思いをしていた子どもとはつながったが、その子と周りの子どもとつながるというところまで考えが至っていなかったと思った。神奈川の高校ではインクルーシブ教育に取り組んでいる。しかし、取り組みをすすめていこうという思いはあるものの、実際にどのようにすすめていけばよいかわからないという不安も強い。この二日間の報告や実践をヒントに取り組みを進めていきたい。

**大阪** 「行ってみないとわからない」「話してみないとわからない」というなかで実際に動くことが大切である。そうすることで課題が見え、信頼関係ができてくる。寄り添うというよりも向き合うというイメージで深くかかわることで、課題の奥に、社会のなかの差別や自身の差別意識に気付かされていく。ちがいが差別の原因になっているのだとしたら、被差別の側に要因を求めるべきではない。人権学習は教えるのではなく、差別の仕組みや社会構造のなかで、なぜ差別が起こるのかについて探求していく学びが大切である。子どもが主体的に学びたくなるようにしていくためには、教師が、子どもの背景にある課題や差別を見抜く力が必要だと考える。今回の報告には、このような視点があったからこそ、実践をとおして子どもたちが変容していったのだと考えている。「福田村事件」は、人が不安な状況に追い込まれたときに同調圧力や身近な人間関係等が働いた結果、差別したり、差別に加担したり、また傍観した結果である。差別していることにブレーキがかからず、自分たちの命を守るために殺してしまうことにつながった。差別は命を奪うものだという認識に立ち直り、人の命を奪わないよう、差別を見抜く力を身につけ、差別をなくしていこうとする子を育てたい。自分の弱さを認め、話すことができるなかまづくりをすすめていかなければならない。総括討論の方向性として示された「つながりをつくる、深める、広げる」というキーワードの、「広げる」は、数を多くするということではなく、多様な人とつながり、広げていくことができるようにしたいと思った。

**大阪** 三重の報告にある、アレルギーが「酷い」という表現が気になった。「反応で」「症状で」という表現の方がよいのではないかと思った。「子どもたちが見た目でどう判断するか」とあるが、知識がないということは恐怖を与え、よからぬ差別を生んでしまう。アレルギーの話をすることで、子どもたちが理解し、受け入れる関係をつくった取り組みは素敵だと思った。もう一つ。学校に来ることができない子どもは大阪市でも増加傾向にある。学校に来ることがしんどくなっている子どもには、オンラインで授業をしている。授業開始10分前にオンラインを始め、仲のよい子どもと放課後に遊ぶ約束をさせるといった作戦をとった。安心できる場所は大人がつくるが、子どもたちの力は大きい。子どもの力を信じながら取り組んでいこうと考えている。

**三重** Aのアレルギーのことは聞いてはいけないのだと子どもたちは思い込んでいた。報告者（三重）は、休んでいるAを心配するような話を学級でし、子どもたちにAに対する思いを巡らせていったというエピソードを話された。大阪市の報告にも、外国につながりのある子どもや学校に来ることができない子どもに対する班長会の話し合いのエピソードがあった。学校に来ることができない子どもたちが増えているという会場からの意見があった。学校に来ること、来させることがゴールではないと思う。私たちが大切にしなければならないことは、三重と大阪市の報告にあったように、思いを巡らせていく子どもたちを創っていくことではないか。その前に、私自身が子どもに思いを巡らせていけている私であるのかを問うていきたい。子どもに思いを巡らせる時間を意図的につくっていく必要があると思う。それが当事者である子どもが知っ

たとき「私の居場所はここにある」と感じるだろう。誰一人取り残さない学級をつくっていった子どもたちが、誰一人取り残さない社会をつくっていくことになるだろう。

**三重**　現在、人権担当として子どもと関わっている。どの報告も人として向き合い、丁寧に関わる取り組みであった。子どもも保護者も先生ではなく人として向き合ってくれた姿を見て変っていったのではないかと思った。また、外国につながる保護者や子どもたちの報告を聞き、自分自身が、相手を知ろうと表面的にはしていたのだろうけれど、実際はそれができてなかったのではないかと考えさせられた。

**三重**　まず教師が厳しい立場にある子どもとつながることが大事であり、教師を介して、つながりが子どもたちに広がっていくのだと考えさせられた。しかし、保護者同士をどのようにつなげていくのかという点は、課題だと捉えている。

学級で落書きが見つかった。その際、保護者から「クラスに韓国の人がいるからな」という差別につながる発言があった。保護者同士のつながりがなかったことに一因があると考え、韓国籍の保護者に、キムチづくりの講師をお願いした。その活動は、閉じこもり気味だったその保護者と他の保護者とがつながるきっかけになった。何かのチャンスがあれば、それを活かして取り組んでいくことは大切だと感じた経験だった。

今日の報告は、差別の現実、学級の人権課題からスタートした実践であった。多文化共生の学習は、おそらく学校の取り組みとしてやらなければならないものであったと思うが、それ以前に「この子どもの厳しい立場を何とかしなければ！」という報告者の視点がすばらしいと感じた。私が勤務している市には、「人権カリキュラム」というのがある。「このカリキュラムさえやっておけばよい。」と捉えている人がものすごく多い。私は、それはおかしいのではないかと感じている。人権課題、学級の課題はどこにあるのか。担任は4月のうちに見極めて取り組んでいかなければならないと強く思っている。

**協力者**　最後に報告者に感想等を述べていただいて討論を終わりたい。

**報告者（三重）**　ご意見をいただき、大変勉強になった。この学びを実践につなげていきたい。

**報告者（大阪市）**　報告に対するご意見のほか、同じように子どもたちと向き合っている報告を聞いたり、討論をして深めたりするなかで、本当に学ぶことがたくさんあった。報告してよかったと感じている。今後につなげていきたい。

報告者（滋賀）「つながる」「広げる」というキーワードのもと、総括討論が行われたが、私の報告に対してご意見をいただいたり、あたたかく聞いていただいたりするなかで「これがつながりの形なのだろう」と感じている。つながるとホッとする。これがつながりの大切な理由の根本なのだろうと思う一方で、私のなかに「つながる心地よさ、大切さ」や、その引き出しがどのくらいあるのだろうと感じた。つながりの実感をもっていればいるほど、子どもたちにその実感を広げることができるのではないかと考えた。私自身が、さらにつながる実感を味わっていきたい。

**報告者（大阪府）**　子どもたちは、知らないこと、わからなことが怖かったり不安に思ったりするのだろう。昨日報告したAや保護者に対しては、つながり切れていなかったという思いがある。だからこそ、今年度関わっている子どもや保護者とのつながりづくりを頑張っている。

**報告者（徳島）**　管理職としてどのようなことができるのか、どのようなしかけをしていくのか等、二日間の学びを活かして、これから新たなことに取り組んでいきたい。

みなさん、放課後に家庭訪問をする等、積極的に関わろうとしている。しかし、近年、働き方改革のなかで「無理をしてはいけないよ」という声がけが多くなっている。この部分の摩擦についても、管理職として先生方を支援していきたい。

**協力者**　この場所が、私たちの学びの場、気付きの場、つなぐ場であったと思う。全人教の場がわたしたちの実践や悩みを語れる場所、居心地のよい場所なのではないかと改めて実感した。

－二日間のまとめ－

**協力者**　一日目のまとめは行ったので、本日の2本の報告と総括討論を振り返っていく。

三重からは、アレルギーが原因で遅刻や休むことが多かったAと外国籍の母親の生きづらさに向き合い、家庭訪問や多文化共生の学習をとおしてつながりをつくり、心が解放されていった取り組みが報告された。目の前にいる被差別の立場にある子どもや保護者は、本当にわかってほしいことが言えずに孤立させられている。それこそが差別の現実であると気付き、「最も厳しい子どもが生き生きと過ごせることが、誰もが生き生きと過ごせることにつながる」と語られた報告者。最も厳しい子どもが誰なのか、差別の現実を見抜き、自分自身の課題だと受け止め、実践することの大切さを確認した。

大阪市からは、渡日の子どもたちをサポートし、周りの子どもたちとつないでいくために、あたたかい学級の雰囲気づくりをめざした取り組みが報告された。見ようとしなければ見えない渡日の子どもたちの不安や苦労、成長が見えるようになったのは、子どもたち同士の支え合う姿のおかげであった。外国にルーツのある子どもたちの母国やアイデンティティを理解するなかで、そのことが傷つけられることなく尊重し合うなかまづくりが重要である。会場からは、多文化共生の取り組みの実践の必要性が課題として挙げられた。学力保障や多文化共生に根ざしたなかまづくりの課題について確認された。

総括討論では、「子どもたちに向き合い、つなぐことつながることが大切だ」という点について、多

くの思いや実践を語っていただいた。私も、子どもたちに向き合い、関わり続ける強さをもち、へこたれそうな弱さを抱きしめながらつながることを信じて明日から現場で頑張っていこうと思っている。二日間、素晴らしい分科会討議をつくりあげてくださった報告者のみなさん、参加されたすべてのみなさんに感謝したいと思う。以上でまとめとさせていただきます。ありがとうございました。